



# 勝馬神社へ急げ!

天翔けるペガサス、神獣ユニコーン、疾駆する汗血馬——。伝説から実在の名馬まで、馬にまつわる物語は世界中に限りない。何ゆえ、人は馬に魅かれるのだろうか？

大道無門という言葉がある。「真理に至る道に決まった門は無い」という意味だが、「広き道を堂々とゆけ」という意味にも使われる。その広き道を堂々と行く象徴的乗り物が「馬」でもある。あるいは人は、威風堂々たる馬の姿、歩み、生き方に憧れているのか。

2026年はウマ年!

大杉神社の境内には、さまざまな神様が祀られている。そのひとつが「勝馬神社」。このおまじなの縁起の良さ。千年である2026年にこそお参りしたい神社だ。

勝馬神社は貞観四（862）年茨城県稲敷郡美浦村信太付近にあった官牧「信太の馬牧」に置かれていた馬樞社を起源とする。官牧とは、律令に基づいて国が管理していた

牧場のことで、軍馬や牛車を引く牛を飼っていた。延喜式（平安中期）によれば、全国十八ヶ国に三十九の牧があったという。

信太は常陸国の馬牧だったが、平安末期に朝廷の力が弱まると廃絶となり、馬樞社は稲敷市幸田に遷され、さらに大杉神社の境内に遷された。

大杉神社では、昭和初期まで4月8日に駒牽祭がおこなわれ、その際には競馬が開催され、10頭ずつ10回、計100頭が出走したという。優勝者の家には、「豊穣が齎される」という名書が与えられたというから、士族かつ牧歌的な話だ。また4月8日という日柄が良い。

平安時代、朝廷では毎年5月の端午の節会に、五穀豊穣や天下泰平を祈念して、宮中武徳殿において競馬会神事がおこなわれていた。ケイバカイではない、「くらべうま」と読む。これを寛治七（1093）年に上賀茂神社に移して執行することになったのが、5月5日の菟葺祭馬だ。

現在では端午の節会という、5月5日だと思われているけれど、本来、端午とは、5月の最初の午の日のこと。1日から12日までのどこかでめぐってくる。やがて陽数である奇数への信仰から、五節句は月日



縄文の昔にまで遡る大杉神社の境内には、元いた地を離れざるをえなくなった近隣の神々が、数多く合祀されている。こういう優しさも、あらゆるものを受け入れてきた「あんばさま」らしい。その一角に、勝馬神社も鎮座している。神馬の石像や、大当たりの御礼絵馬など、否応なく眼を引くお社である。あんばさまが「大穴狙い」のような欲望さえ叶えてくれる優しいおばあちゃんならばこそ、勝馬様も安住の地を得られたのだろう。

# 大杉神社に勝馬神社あり!!

最新お守りで勝ち運をゲット!



勝馬御守は、競馬はもちろんあらゆる勝負ごとの勝負運、当選、合格、投資の成功、他者に秀でるなど、さまざまな「勝ち運」を守護し、導いてくれる。馬には「神に願いを届ける」という属性もある。初穂料1000円

## 御利益に大期待! 勝馬神社×キットカット



勝馬神社限定のキットカットは、大杉神社の限定品。無くなり次第終了だが、運が良ければ初穂料1件1万円以上の御祈禱をお願いした参詣者に配られる。疾走する馬のオリジナルパッケージは、持っているだけで運が上向いてきそうだ。「きっと勝つ」みたいな語呂も良い。

こころした不思議なめぐり合わせ、重層無尽の縁からか、勝馬神社には馬の縁の渦が巻く。  
近年では、ゲーム、アニメ、漫画などのクロスコンテンツとして人気の「ウマ娘」に、大杉神社がモデルとして登場したことからファンの間で聖地ともなり、話題を呼んだ。そしてさらに、「推しを勝たせたい」推活の人たちにも、縁の輪が広がっているといっ。

ちなみに美浦は、常陸国信太郡の中心の土地で、現在トレーニングセンターのある場所は、「シダツハラ」と呼ばれていた平坦地で、信太の馬牧があったと想定されるところだといっ。トレーニングセンターは、千年の時を経て、平安の馬牧が甦った……といえるのだ。  
かくも由緒ある勝馬神社には、さまざまな馬の関係者が参詣する。近くに日本中央競馬会（JRA）の美浦トレーニングセンターがあることから、騎手、調教師、馬主などなど、その道のプロフェッショナルたちの信仰も厚く、そつした関係者が奉納した玉垣石柱や馬蹄絵馬も多数ある。競馬ファンには、見どころだろう。

中競馬会にエントリーするため、馬を運りすぐる儀式に端を発したもののだろう。  
おそくは信太牧時代の、宮中競馬会にエントリーするため、馬を運りすぐる儀式に端を発したもののだろう。  
4月8日という設定は、端午のおよそひと月前という点において、古い風習であろうことが察せられる。  
一日に行事がたくさん重なるため例外的に7日）とされるようになるのだが、

で陽数が重なる3月3日、5月5日、7月7日、9月9日（1月は、1日に行事がたくさん重なるため例外的に7日）とされるようになるのだが、

大杉神社の近くに、日本中央競馬会(JRA)の美浦トレーニングセンターがあることから、勝馬神社には騎手、調教師、馬主等その道のプロフェッショナルたちも多く参詣している。そうした競馬関係者が奉納した、玉垣石柱や馬蹄絵馬も多数あり、それがまた、勝馬神社を訪れた競馬ファンたちの見どころにもなっている。

中央競馬のジョッキーとして活躍し、一時期まで勝率日本一を誇った「名手」岡部幸雄氏も大杉神社と関係が深く、生涯優勝回数を刻んだ燈籠や玉垣石柱を見ることが出来る。

## 競馬ファン関係者の聖地!!



この蹄鉄のひとつひとつ、馬券の一枚いちまいに、それぞれの思いや、物語があるのだらう。「ツワモノどもが夢のあと」という気持ちになる。これも、お参りの妙というものか。

勝馬神社に捧げられた絵馬には、時折、びっくりするような「御札」が書かれている。「実際に、競馬で一獲千金のひと財産を築くということがあるのだなあ」と痛感する。



# 勝馬神社の注目ポイントを紹介

見逃せないぞ!

さまざまな神がみを包括する重層的な顔を持つ大杉神社だが、そのひと柱ひと柱の神様たちが、それぞれにユニーク極まりない。勝馬神社にも、古代から現代に至るさまざま多彩な見どころがある。そしてその物語は、現在進行形で紡がれ、メディアや口コミを巻き込みながら、また新たな伝説や流行を生み出している。神様が生きている場・大杉神社。勝馬様のスポットをご紹介します!

## 大杉神社に伝わる「あんば様」の御鞍

## にも登場!!

週刊ヤングジャンプに連載された『ウマ娘 シンデラグレイ』の中で、オグリキャップが参詣する神社のモデルとして大杉神社が登場したことで、大杉神社はウマ娘ファンたちの聖地となった。非常に現代的な話題のようであり、案外これは日本の信仰のあり方として普遍的なものかもしれない。熊野の温泉で甦る小栗判官伝説によって熊野詣が嗜好されたり、『東海道中膝栗毛』によってお伊勢参りに行きたくなったりするなど、日本人は信仰心よりも、物語によって宗教施設へと導かれることが多いのだ。

こうした姿勢は、海外では「不真面目」と非難されるかもしれないが、日本の神様の多くは「それも御縁」と解釈する。もとよりあんばさまも、そうに違いない。

「勝鞍(かちくら)」とは、その馬が一位になったレースの数(実績)をあらわす競馬用語。そもそも景気の良いところへ、神様の御鞍とは、まさに縁起の良いことこの上ない。



大杉神社の祭礼においては、神輿の渡御の際に馬がつく。これは、あんばさまがお乗りになる馬で、そういう場合の「あんばさま」は、観念的に漢字をあてるなら「安馬様」であるという。「あんばさま」が、河川海上では安波、家内安全を願う際には安場などと表記されることは、前にもふれた。煙草農家の多い地域においては「安葉」となるともいうから、なんともパーソナルな神様だ。安馬様の馬につけられる鞍は、精緻な螺鈿細工をほどこした見事なもので、勝馬神社でいただいた御札やお守りを鞍の前に並べると、まさに「勝鞍をあげる」という感じになる。神様のあられる場を神坐(かむくら)というが、まさにこの御鞍は、正しく神坐だ。

# 境内に顕現した勝馬の御姿では!?



これは数年前のお話。台風で、大杉神社の境内にあった椎の大木の枝が折れた。すると、その折れた跡が馬の顔のかたちに見えるように。不思議なことにその桎は、勝馬神社の目の前の木であった。博才のある人というのは、勤の良いものだ。あるいは、霊感や第六感のたぐいではなく、身のまわりで起こったあらゆる現象をポジティブにとらえ、物語として博打の勝算に結びつけていく、のかもしれない。

いずれにしても、この現出した馬の顔を写メに撮ると、競馬で勝つとか、受験で合格するという物語ができた。実際に、そういう人びとが多数現れたのである。いくつかの偶然が重なり、しかし、その効果に一定の法則が見出された時、伝説は発生するのだ。

抽象的な刺激の中に、意味のある図像を見出す心理を「パレイドリア現象」というけれど、この枝はどう見ても具象的に「馬の首」。それも、勝馬神社の目の前の樹とは!!



勝馬神社は、多くの人を惹きつけてやまない。もちろん「競馬で大穴を当てたい」という率直な欲望もあるだろう。しかし、実際に勝馬神社を訪れ、人びとの願いや神様への御礼を書き込んだ絵馬などをまのあたりにすると、単なる欲望では片づけられない「思い」があることが窺える。

そもそも馬という生き物には、ファンタスティックな物語がつきものだ。西欧のユニコーン伝説はもとより、日本でも「聖徳太子が天馬に乗り、はるかな場所を自由自在に行き来した」というような伝説は、枚挙にいとまがない。

恐らくは、移動スピードの速さに由来するのだろう。現代人はあまり気づかないことだが、基本的に歩くより他に移動手段を持たなかった前近代人たちは、移動スピードの速いものを特別視した。何故ならそれは、時空間を超越するもの、だからだ。

「ふね」という日本語がある。現代人には「船」や「舟」がお馴染みで、水上を行き来する乗り物をさ

すが、酒を醸す槽を「さかふね」、湯を沸かす浴槽を「ゆぶね」という。どれも、そこに入ったものがあるいは場所が、出る時には大きく変化していることが特徴だ。つまり、時間が、空間が、あるいはそのどちらもか、はたまた中身が、超越するわけだ。

馬も、そうした「雷貫」の一種なのだ。人では到底及ばない速さや持久力で移動し、乗った者を別の空間へと運んでしまうのだから、古代人が特別な存在であると考えたのも不思議ではない。そもそも「絵馬」は、本来は本物の馬を神に捧げるものだった。馬のような特別な移動装置で運ばなければ、到底、神様のことろまで届かない、と考えたからだろう。

そう考えると、人びとが勝馬神社に魅かれる理由も、窺えてくる通りがよいのだろう。疾走する馬のよびに爽やかに、清々しく、己の思いも駆けてゆく——そんなイメージが、人ひとをこの神社に惹きつけるのではないのか? そしてその魅力はスパイラルとなって、さまざまなムーブメントを生み出している。

## 豊富に揃ったお守り

勝馬神社のお札やお守りは、大杉神社の中でも豊富にして多彩。蹄鉄型のもは、外国人にも人気だ。蹄鉄は、U字型が「幸運を集め、ためる」と考えられ、西欧においてもラッキーグッズとされてきた。

サラブレッドのたてがみを用いた「立神守」も競馬ファンに大人気。髪は神に通じる。中国語では髪は「ハツ」と読む。日本語で「かみ」というのは「上(かみ)の方にある毛」だから。下半身の毛は「かみ」とは言わない。ゆえに日本において神様とは「上の方にいらっしゃる」存在。それともはるか彼方では中国語で「神」を「シン」と発音する中国では、神様は世界の中心にいるのだ。

古来、髪には力が宿ると考えられ、尼將軍と呼ばれた北条政子も、自分の髪を入れ込んだ豊茶羅や仏像を作らせている。サラブレッドのたてがみは、なんだか効き目がありそうだ。



### 『ウマ娘』

『ウマ娘 プリティーダービー』には、漫画、アニメ、ゲームなど、さまざまな楽しみ方があがるが、関連の場所をめぐる「聖地巡礼」もそのひとつ。大杉神社は最良のフィールドかも。

©Cygames, Inc.